

吉備国際大学研究紀要
 (人文・社会科学系)
 第23号, 53-63, 2013

スポーツ社会システムの構造形成 日本サッカーの発展過程と社会的背景

清水 正典

Structure Produce of Sports Social System —Development Process and Social Behind of JAPAN Soccer—

Masanori SHIMIZU

Abstract

Soccer was introduced from England to Japan in 1873. But during Meiji period Soccer was not became popular sports in Japan.

In the world, especially Europe and South America soccer diffused rapidly end of the 19th century.

Same time in Japan baseball diffused among student and became popular sports because of newspaper articles. There were some social factors about first baseball boom. This is the peculiarity of Japanese sports history in modern society.

The first boom in Japan about 1960. In 1964 Tokyo Olympic Games that first Olympic Games of Japan and Asia was hold. Because of Japanese government consolidated the Sports Social System, soccer was changed and filled up own intensification system.

In 1993 J League was start, and after that Japan soccer has been developing rapidly. There are some changing factor especially sports value of Japan.

This thesis consider the social factor of recently soccer boom of Japan.

Key words : Sports Social System, Structure produce, J League, Social structure

キーワード : スポーツ社会システム, 構造形成, Jリーグ, 社会構造

緒言

Jリーグ発足20年を経過し、日本においてサッカーはますます盛んになりつつある。2011年には女子がワールドカップで初優勝、12年にはロンドンオ

リンピックで男子が4位、女子が銀メダルを獲得し、最近では多くの若手選手がヨーロッパのプロリーグで活躍、その結果多くの海外サッカーの情報が日本に紹介されるようになってきた。

これまで、幾度となく指摘してきたように、日本

のサッカーの劇的な発展は1993年のJリーグ発足以後である。Jリーグの発足は日本サッカーの社会システムの構造を根本から変化させ、日本サッカーの世界水準へのレベルアップをもたらした。その結果1998年のフランスワールドカップから2010年の南アフリカワールドカップまで4大会連続でワールドカップ出場を実現、98年までの出場実績が0であったことを考えれば劇的な成長と言わざるを得ない。

その原因についてこれまでは、社会システムという観点からいくつかの研究を行ってきたが、今回はより社会学的観点から分析を行い、考察を試みてみたい。

着眼の視点は以下の通り。

- ①93年のJリーグ開幕以後のファン層の拡大の社会的要因は何か
- ②サッカーのファン層の多くは40歳以下の若者層であるが、これは社会的にどういった背景があるか。
- ③バブル崩壊以後経済格差、特に若者の経済水準の低下が進んでいるが、この現実がサッカーをはじめとするスポーツのいかなる影響を及ぼしているか。
- ④サッカーの持つ社会的意味が現代の日本ではどのようにとらえられているか。
- ⑤欧米でかつて起こったサッカーの爆発的普及との社会的関連性は何か。

以上の点について考察を行い、サッカーブームの背後にある社会的要因について論究することを目的とする。

I. 日本におけるサッカー発展のプロセス

(1) 明治期

日本にサッカーが伝えられたのは1873年と言われる。当時の赤坂兵学寮、後の海軍兵学校にイギリスの海軍士官アーチボルト・ダグラスが伝えたのが最

初と言われている。1863年のフットボールアソシエーションの結成からわずか10年後に伝えられており、当時の状況からするとまだプレスタイルが形成途上にあった物と考えられる。アーチボルト・ダグラスは後の帝国海軍強化のため招聘された技官で、当時世界の海軍の戦闘方法について「艦隊決戦」の理論を伝えたとされている。¹⁾ 従ってサッカーはあくまでも学生たちの余暇活動の手段として紹介されたものであり、正課の教材としてではなかった。ちなみに当時はまだサッカーという言葉は世界的に普及しておらず、日本では「フットボール」として紹介されている。言うまでもなくfootballをこのように当時は発音したと考えられる。

当時の海軍は「文明開化」の先頭を走る組織で、兵学寮内の行動、生活様式はすべて洋風とされていた。すなわち洋服の着用、洋室での生活、洋食の導入など衣食住のすべてにわたり欧米式が徹底された。明治期の日本人の生活様式の欧米化にも大きな影響を及ぼしたとされ、²⁾ 社会的影響力は非常に大きかったと考えられている。しかしなぜかサッカーは海軍から発信されることなく、明治期、さらには戦前の日本社会に大きなインパクトを持って受け入れられていない。恐らくは海軍兵学寮という閉鎖的空間においてしかも当時あまり重視されなかった学生の余暇活動のオプションの一つに過ぎなかったことが、その後の普及を阻害したと考えられる。さらにこの後海軍においてサッカーが正課および余暇活動として継続的に行われた形跡がなく、海軍におけるサッカーの伝来は社会に対して開かれることがなかった。

その後日本においてサッカーが広まっていくのは1886年の東京師範学校の設立において、体操主任教官であった坪井玄道が教材として取り入れ、生徒に教えてからで、師範学校時代にサッカー（坪井はフットボールと呼んだ）を経験した学生たちが卒業後地元で教師として赴任してからであると言われて

いる。しかし、その過程の中で爆発的に普及すると言うことはなく、この点が欧米と決定的に違う点である。

欧米では、サッカーの伝来以後およそ20-30年間急激な普及現象が起きており、1880年代から1920年代にかけ各国でメジャースポーツとしての地歩をほぼ確立している。日本ではなぜ爆発的なブームが起らなかったのであろうか。

まず、日本では野球が爆発的に普及したことがあげられる。野球はサッカーが伝来した前年の1872年にアメリカ人の英語教師ウィルソンが慶應義塾大学に伝えたのが始まりであるが、わずか一年の違いでメジャー種目になった背景には、1884年に始まる一高ブームおよび1904年の早慶戦に始まる東京六大学へと社会的ブームが継続したこと、そしてその背景には当時の主要メディアである新聞が大きく関与したことがあげられる。³⁾

第二点目として、欧米におけるサッカーの普及発展は各国の労働者階級が中心となったが、明治期の日本にはまだ社会的マジョリティーとしての労働者階級が存在しなかったことがあげられる。サッカーは世界的に見れば特に20世紀初頭までは「労働者のスポーツ」として圧倒的に支持され、その背後には当時すでに起こりつつあった資本家対労働者の階級闘争の構図が存在するが、明治期の日本ではまだその構造や社会的価値観が形成されておらず、「労働者階級のシンボルとしてのサッカー」というキャッチフレーズが機能しなかったことにあるのではないだろうか。むしろ明治期の日本においては、社会的支配階級に所属する学生や海軍軍人、さらには医学生に主に受け入れられており、世界の流れとは逆行する形でその草創期を迎えたことが、爆発的普及につながらなかった原因の一つと考えることができよう。

(2) 大正から昭和初期

サッカーが全国的に広まっていくのは大正になってからで、先の東京師範学校の卒業生が全国に広めていく原動力になったのと同時に、ようやく大正時代になって学校体育にスポーツが教材として導入されることとなり、それにより国民がサッカーに触れる機会を持つことができるようになっていく。⁴⁾ 体操科にスポーツを教材として取り入れるようになった背景には、欧米の教育理論が大正期に積極的に日本に導入され始めたこと、その一環としてスポーツ教育の重要性が指摘されていたことがあり、それまで富国強兵実現のための「体操」中心主義が一時的に軌道修正された時期であった。

さらにその背後には日露戦争から第一次世界大戦終結に至る期間、明治日本が完成期を迎え、特に社会経済的発展がこの時期顕著となり、さまざまな大衆文化が花開くこととなる。一般に言われる大正モダニズムであるが、この時期はとりもなおさず日本初の大衆社会出現の時期であり、活動写真や小説などの文学、宝塚歌劇団などの新進気鋭の芸能文化といった多くの大衆文化が花開いた時期である。あまり指摘されることはないが、実はスポーツの普及発展もその流れの一つであったと考えることができ、この時期初めてスポーツは市民権を得て国民の間に普及してゆくこととなる。

サッカーもこの流れに乗って多くの愛好者を獲得し、1920年には大日本蹴球協会が設立されて本格的な全国組織として活動を始めることとなり、さらに1925年には全日本蹴球選手権大会が開幕、国内体制が徐々に整備されてゆくこととなる。

こういった一連の活動の中でサッカーが本格的に注目されたのが1936年のベルリンオリンピックでこの大会日本代表は初のベスト8となり、世界デビューを飾ることとなった。しかし、1920年代以後の急速な経済不況のあおりを受けて、我が国は軍国主義化して行き、せっかく花開きつつあったスポー

ツ文化も戦争の足音に飲み込まれてゆくこととなる。

(3) 東京オリンピック前後

日本サッカーが本格的に発展することとなるのは太平洋戦争が終結し、社会が成長軌道に入る1960年代に入ってからである。終戦後、スポーツ文化を重視するアメリカが日本を占領したことにより、明治から終戦まで続いた「富国強兵」のための「体操科」が劇的に改変され「体育科」とされ、そこでの教材は各種スポーツが中心になるとともに、科学活動も奨励され、各種スポーツの実施が積極的に行われるようになった。ここでも野球は優遇され、アメリカのメジャースポーツでもあったことから、終戦の年の1945年の12月にはプロ野球の活動は再開を許されている。⁵⁾これに続いて高校野球も翌年には再開、戦後も野球の独走態勢は維持されていく。

野球に続いて以後数年のうちに他のスポーツ団体も武道以外は全て活動を再開し⁶⁾戦後はスポーツが社会の前面で活躍するようになる。1950年の朝鮮戦争で息を吹き返した日本経済は以後長期の経済成長に入り、社会も復興モードに入った中で、国民の経済水準は急速に向上、それに伴いスポーツ活動が大きく普及していくこととなる。

この流れをさらに加速させたのが1964年の東京オリンピック開催で、1959年のローマのI O C総会で開催が決定されたが、以後国を挙げてのスポーツ振興の時代を迎え、日本のスポーツが飛躍的に発展することとなった。

サッカーもこの東京オリンピック開催に合わせて、強化普及活動を開始、招致決定の翌年の1960年に協会幹部がドイツを視察、強化システム構築のための情報収集とともに、初の外国人コーチとしてデッドマール・クラマー氏を招聘し、彼の提言を元に日本サッカーの構造変革に着手することとなる。

クラマーは現場での指導手腕にも優れ、実際に日

本代表の指導を行ったが、それと同時に長期的視点から日本サッカーが今後発展していくための重要な以下の提言を行っている。

- ①指導者の質的向上のための指導者制度の構築とコーチングアカデミーの創設
- ②プロリーグ又はそれと同等のリーグの創設
- ③芝生のグラウンドの全国的建設
- ④審判員の質的向上と審判制度の構築

これらの提言は、ともすれば目先の大会での結果を求める傾向のあった日本のサッカー関係者に、世界的視点を持ち、長期的ビジョンを持つことの重要性に目覚めさせるとともに、スポーツの普及発展には社会的制度やシステムの構築が必要との認識を植え付け、「グラウンドの中」だけを向きがちだった日本のスポーツ関係者に「グラウンドの外」の重要性を認識させる決定的な機会となった。⁷⁾

他の競技団体が、代表選手のみ強化に終始する中で、日本サッカー協会は東京オリンピック以後の持続的發展をにらみ全国のサッカーの社会システム構築に向けスタートを切ることとなった。

一連の活動の結果、東京オリンピックでは1936年のベルリン以来となる史上二度目のベスト8に進出、さらに68年のメキシコオリンピックでは日本サッカー史上初の銅メダルを獲得、釜本がやはり日本史上初の得点王になるなど、日本サッカー史上初のピークを迎えることとなった。この結果日本に第一次サッカーブームが到来、多くの子供たちが将来の釜本を夢見て、サッカーを始めるようになる。

(4) 高度経済成長期

東京オリンピックを契機に日本の経済成長はさらに加速、高度経済成長期を迎えることとなる。この動きと歩調を合わせるように、そして東京オリンピック効果にも後押しされて日本のスポーツは一大発展を遂げる時代となる。

それまでも野球はプロ野球特に王、長島を要する

巨人の活躍もあり、競技者もファンも多かったが、東京オリンピック以後オリンピックで活躍した女子バレーや体操競技、そしてサッカーに多くの子供たちが集まり、学校のクラブ活動や、やはりオリンピックを契機に構築されたスポーツ少年団などの地域スポーツクラブが活性化、日本のスポーツの底辺が急速に拡大していった。

さらに競技スポーツだけでなくレジャースポーツが急速に発展、特にテニス、ゴルフ、スキー、ボウリング、フィットネスの五つの分野では急速に愛好者が増大、1970年代にはいずれも1,000万人以上の愛好者を獲得することとなる。⁸⁾

この未曾有のスポーツブームの背景には第一に高度経済成長による国民の経済的余剰の増大、第二にメディアとくにテレビ放送の普及による国民のスポーツに対する関心の増大、があげられ、1920年代の大正モダニズム以来の本格的な大衆社会の到来と軌を一にする物であろう。その中でも日本の特異性は急激な経済成長の結果、国民所得は世界水準を短期間でクリアし、多くの国民が中流階級の意識を持つようになった結果、日本でブームとなったスポーツ種目の多くがかつての上流階級のスポーツであるという世界的にも特異な現象を生み出したことである。⁹⁾ この背景は様々に分析できるが、ここでは以下の六点にまとめてみたい。

- ①戦後日本社会はアメリカ合衆国をモデルとして構築されたため、アメリカ的価値観すなわち、大衆社会による階級意識の希薄化により、経済的に可能であれば上流階級文化であっても抵抗なく受け入れたこと。
- ②日本の高度経済成長は国民の経済格差を縮小し、大多数の世帯で経済的支出を伴う上流階級のスポーツであっても実施が可能となったこと。
- ③そもそも階級意識の希薄な日本において「一億総中流意識」が1970年代には構築され、所得に

よる階級格差が消滅していたこと。

- ④メディアにより積極的に報道されることにより国民の興味関心が向上したこと。
- ⑤ゴルフ等企業が営業活動の一環として積極的に活用したこと。
- ⑥愛好者の急激な増大が巨大なマーケットを形成、当該種目を中心とするスポーツ産業が成立したこと。

一方サッカーは、メキシコでピークを経験した後、世の中の動きとは逆行する形で低迷してゆく。原因は、60年代の段階ではまだ十分な選手層が確保できておらず、68年のメキシコオリンピック以後の世代交代がスムーズに行えなかったこと、その背景としてクラマーの提言を受けて始められた日本サッカーリーグJSLがまだ十分に整備されていなかったことがあげられる。以後オリンピックは1996年のアトランタまでの28年間一度も出場することはかなわず、ワールドカップはそれまでもそうであったが98年まではアジア最終予選が突破できなかった。

しかし70年代に入り地殻変動は確実に起き始めていた。とりわけ注目されるのは高校サッカーを頂点とする少年サッカーの隆盛である。高校サッカーは70年代に入り飛躍的な進歩を遂げ特に高校サッカー選手権はJSL以上に熱狂的なファンを獲得、メディアにしばしば取り上げられるようになり次第に注目度を高めていった。さらに高校に選手を供給する中学校年代や小学生年代は地域のスポーツ少年団が熱心に普及育成活動を展開、他の種目に先駆けて地域スポーツの活性化を担っていた。特に埼玉や静岡など早くから地域の少年団を充実した地域が、高校サッカーで活躍する高校を輩出し¹⁰⁾ スポーツの発展における地域の重要性を先取りし始めていたのである。さらに70年代後半には少年団加入者数が一人勝ちだった野球に肉薄、80年代には逆転するという現象も起きている。

直接引き金になったと言われているのは1986年に

上梓されたアニメ漫画「キャプテン翼」で、このアニメに共感した多くの少年たちがサッカー少年団の門戸をたたいたと言われているが、このアニメの社会的メッセージはそれまでの日本のスポーツ界の伝統的な「縦社会」「礼儀と規律」「根性に代表される精神至上主義」からの脱却を主張しそれが当時の少年たちの心情と合致したためと言われている。¹¹⁾ 日本の伝統的価値観からの脱却、別な表現ではスポーツ価値観の欧米化ともいえるこの変化は表面的には高度経済成長による生活スタイルの変化に伴う物と考えられるが、さらにその背後には新たな社会階層の形成という可能性も考えてみたい。

(5) バブル崩壊以後

80年代に入り日本の経済発展はとどまるどころを知らず、次第に世界経済の先頭を走り始める。特に毎年の貿易黒字の拡大は顕著になり、諸外国が次第に批判の矛先を向けてくる中、特に対日貿易赤字の多かったアメリカが日本に対して貿易黒字の縮小を要求、これを受けて政府は内需拡大へと舵を切った結果、バブル経済が出現し次第にコントロール不能になってゆく。その結果1989年に株価が反転、急速に暴落をしてゆく中でバブル経済は崩壊した。

その4年後Jリーグはスタートする。そもそもの発端は80年代の日本経済の好調に目をつけた当時のFIFA会長のジョアン・アベランジェが、新たなサッカー市場を開拓すべく日本に着目、当時の日本サッカー協会幹部と近い将来のワールドカップ日本開催を打診したことに始まる。これを受けて日本サッカー協会は1989年に活性化委員会を設立、ワールドカップ開催に向け本格的準備に入る中で、日本代表のレベルアップのためにも現行のJSLを改組して新たなプロリーグの創設が必要との結論に達した。

その後いくつかのプロセスを経て93年にJリーグがスタート、日本サッカーの新たなステージが始まることとなる。この一連のプロセスについては社会

システム論的研究をこれまで行ってきたのでここでは割愛し、変わって当時のブームの社会的背景について論じてみたい。

Jリーグは今日もそうであるが、参入チームに対して当時としては異例のチーム名から企業名を外すことを要求した。当初前例もなく、企業名を外すことで企業に対する利益がないと考える企業からは激しく反発されたが、一方で企業の社会的貢献を強調する企業メセナが強調され始めた時期であり、我が国の経済界としてはスポーツにおける最初の社会貢献のケースとなることもあって最終的には承認された。同時に当時はまだ企業にも経済的余力かがあり、最終的には企業の利益になるとの判断から可能になったと考えられる。もし仮にJリーグのスタートが現在のような厳しい時代であったならば果たして企業が承認したかどうかはきわめて不透明である。その意味で社会経済的にタイミングがよかった面もある。現にリーグがスタートしてブームとなることが確実にになると当初の3年程度は莫大な投資が行われその資金を元に多くの有名外国人選手や監督を招聘し、Jリーグは活況を呈した。

第2点として「ドーハの悲劇」があげられる。1994年に開催されたアメリカワールドカップのアジア最終予選において、日本はイランとアウェーで対戦、当初2点リードしていたにもかかわらず後半ロスタイムで追いつかれて同点となり、日本サッカー史上初のワールドカップの切符を手にすることができなかった。サッカー協会としてもできるだけ早い段階でワールドカップ出場は実現させたかっただけに、この敗戦はきわめて深刻に受け取られたが、国民に対してはサッカーに注目させる絶好の機会となり、同時に最後まで何が起こるかわからないサッカーのおもしろさを全国民に知らしめる絶好の機会となった。以後多くの人がサッカーに魅せられてJリーグの応援にスタジアムに足を運ぶこととなる。

第3点として、プロ野球や大相撲などこれまで支

持されてきた伝統的なスポーツにはない新しいスタイル、すなわち「自由」と「スピード」をベースとした脱精神主義、脱縦社会、脱規範主義が特に1970年代以降生まれた若者世代に支持されたことである。発足当初ファン層は20代で現在でも40代以下がファン層のメインという現実から、先に記したスポーツにおける日本の伝統的価値観の変化に適応した層が大量に出現していることが考えられる。この点については以下で詳述する。

以上三点が発足当初のJリーグを支えスタートダッシュを成功させた要因として考えられる。

II. 日本におけるサッカーの発展と社会的背景

これまで見てきたように、日本サッカーの発展プロセスにおいては各時代における社会的背景が密接に関連しており、とりわけ近代日本における社会的価値観の変化という重要なテーマと連動することが、おぼろげながら見えてきた。特に高度経済成長以後1970年代から80年代にかけて若者の間で大きな価値の変化が起こっていることが予想され、新たな社会階層出現の契機となっているのではないかと。

格差社会が叫ばれる今日、特に35歳以下の世代の収入の低下は顕著で、将来のキャリアの形成から、結婚、家族の構築など、これまで常識とされてきた生活スタイルが根本的に変化してゆくことが明らかとなっている。¹²⁾ この層とサッカーのファン層が一致しているという研究結果はまだ存在しないが、世界的に見た場合、サッカーファンの経済的水準とその社会的価値観に、日本が近づきつつあるのではないかとという問題認識がある。これは是々非々の問題ではなく、日本が社会構造として世界のグローバルスタンダードに近づきつつあるのではないかと、すなわち本来の意味での大衆層が日本に急速に増大しつつあるのではないかと、そのような観点から以下に分析を行ってみたい。

(1) 社会経済的要因

スポーツの社会的発展はその社会の経済的発展と密接に関連している。スポーツが近代イギリスで発生したとき、イギリスは産業革命を経て経済的に成長し、新興中産階級という新たな社会階層が形成され、この新興中産階級がイギリスのスポーツの普及振興を担った。我が国においても先に記したように、最初のスポーツの普及は1920年代の大正モダニズムと同時期で、社会的な経済活動が戦前としては活発に行われ、国民所得が増大し、これを背景に様々な大衆文化が花開いた。そして、戦後の高度経済成長期に入り、国民所得が飛躍的に増大するに及んで、多くのスポーツブームが出現、国民の生活の末端にまでスポーツ文化が浸透することとなった。

このように社会におけるスポーツの発展は洋の東西を問わず、その社会の経済的発展と密接な関わりがあり、経済の発展はスポーツの発展を導く不可欠の要因であることが明らかである。

ただ、スポーツと一言と言っても経済的階層によりその志向に大きな違いが出てくる。かつて欧米ではスポーツは王侯、貴族等上流階級の文化であり、一般庶民には縁のない文化であった。上流階級で行われたスポーツとしては、乗馬、狩猟、ゴルフ、テニス、クリケット等で、特にスポーツの母国と言われるイギリスでは、マナーと礼節が重要視され、社交の場としての機能を持つ文化であった。これに対して一般大衆がスポーツ文化を持つようになるのは19世紀後半で、最初はボクシング等の格闘技が主流であったが、次第にフットボールがメインとなるようになり、20世紀には特に労働者階級の代表的なスポーツ文化として定着した。そこでは上流階級のスポーツとは異なり、チームに対する帰属意識と、勝利に対する強烈な希求、自由な感情表現などが求められ、20世紀の中頃までカウンターカルチャーとしてネガティブな評価を与えられることが多かった。

この状況を打開したのがテレビで、テレビの登場

により世界中で多くのファンを獲得、階級の壁を越えて巨大なファン層を構築するとともに、特に第二次大戦以後、かつての労働者階級が欧米で中産階級化し、経済的に豊かになるとともに、それぞれの国での主力階級となって政治的にも社会的にも発言権を増した結果、サッカーなどかつての労働者階級のスポーツがメインカルチャーとしての市民権を獲得し世界的に認められるようになっていく。このようなプロセスで第二次大戦後の特に欧米社会ではスポーツの大衆化が起こり、大衆文化としての確固たる地位が築かれることとなった。

(2) 大衆社会の形成

大衆社会の最初の出現はアメリカ合衆国と言われ、1930年代のアメリカの経済成長とともに華やかに出現した。映画、ジャズ、ファッションなどあらゆる領域でそれまでにはない斬新な文化が花開き、一世を風靡した。かつて文化は上流階級のみのもので一般大衆には縁のないものであったが、1930年代のアメリカでは人類史上初めて大衆の意思が反映された文化が構築され、スポーツもその一つとして世界に先駆けてメジャーリーグやアメリカンフットボール等のプロスポーツが華々しく開催された。

第二次世界大戦後、ヨーロッパ各国がやはり工業化による経済成長を実現、ドイツ、イタリアなどかつての敗戦国やスペインが高度経済成長に入り、これと比例するようにサッカーの大衆化が急速に進むこととなる。そして1960年代には先に記したように日本も高度経済成長を迎えスポーツの大衆化が急速に進展することとなる。

しかし、この時期の日本ではサッカーの爆発的普及は起こらず、ここが欧米特にヨーロッパとの決定的差異である。この原因について言及した研究はまだ存在しないが、仮説として考えられることは次の四点である。

①ヨーロッパでは20世紀の初頭にはプロリーグが

形成され、サッカーのまとまったファン層が構築されていたこと。

②同じサッカーでも国ごとの独自性が早くから確立され、各国の独自の文化としての意識が高まっていたこと。

③高い競技力を有し、オリンピック優勝又は上位への進出、ワールドカップに出場する国が多く存在したこと。

④古くから存在するローカリズムとナショナリズムがサッカーと結びついたこと。

これらの理由からヨーロッパでは第二次大戦後すでにサッカーの社会的承認が確立されていたのに対して日本では

①スポーツにおけるナショナリズムの高揚という価値観がまだ希薄であったこと。

②アジアがまだ経済的な発達段階を迎えておらず、スポーツの大衆化も起きていない状況下で、サッカーの存在価値も低く、アジアにおいてサッカーでナショナリズムを高揚する傾向がなかったこと。

③日本のサッカーのレベルが低く、国内にサッカーにおける国際競争という認識が存在しなかったこと。

④プロリーグが存在せず、サッカーのファン層が圧倒的に少なかったこと。

などから、高度経済成長期における成長の波に乗ることができなかったのではないだろうか。以上の点は今後継続的に検証を重ねてゆきたい。

(3) 新たな社会階層の出現

I-(5) で見たように93年以後、堰を切ったように日本サッカーは発展を遂げるが、そのブームを支えたのは1970年代以降に生まれた現在の40歳以下の世代である。この世代がそれ以前の世代と比べて伝統的な日本のスポーツ価値観とは異なる価値観すなわち、欧米に近い価値観を持っているのではない

かと先に指摘したが、さらに仮説として以下の観点を提出してみたい。

- ①核家族化の影響により人間関係が希薄な中で育ったと言われるこの世代の中には、他者との強い人間関係構築への希求があるのではないか。
- ②同時に地縁血縁が消滅してゆく時代に成長した経験から確固たる準拠集団に所属する経験の希薄さから、プロサッカーチームにその代償を求めているのではないか。
- ③Jリーグは大都市圏もさることながら地方にも多くのチームを有し、地方のファン層が多い。郷土愛を持つ若者がファン層のかなりの部分を占めているのではないか。
- ④サッカーは地元チームに対する応援とともに日本代表も応援することができ、ローカリズムとナショナリズムの欲求を同時に充足することができる。このダブルスタンダードは日本ではサッカーが最も充実して有しており、今日日本では失われたローカリズムとナショナリズムを求める人々がサッカーのファンになっているの

ではないか。

以上の他にも考えられるポイントはあるが、今回とりわけ社会的視点から仮説を提出してみた。いずれもキーワードは「人のつながり」に関するものであり、今日、家族や組織の形態が激変する中で「漂流する若者」が問題となっているが、Jリーグや日本代表が確かなメッセージを発しているところに多くのファンが引きつけられているとも考えられる。この点も今後検証を続けてゆきたい。

いずれにしても70年代を境に日本の社会構造は大きく変化したと言われ、日本人の「質」も大きく変わったと指摘する声もある。その変化の中で新たな社会階層が生まれ、その人々が日本のサッカーを応援している現実、スポーツの枠を超え、社会構造の研究としてもきわめて興味深い領域である。

今後は、1970年代以降の「新人類」と言われる人々と同世代の外国人との質的相違点を明確にし、それがサッカーファンの構築にどのような差異をもたらしているのかについてさらに研究を深めてゆきたい。

脚 註

1) 司馬遼太郎「坂の上の雲」

アーチボルト・ダグラスにより日本海軍は初めて艦隊決戦の思想に接することとなり、これが後の日露戦争における日本海海戦の勝利につながったとされている。さらにその結果、太平洋戦争終結まで帝国海軍の中心戦略となる。

ちなみに司馬遼太郎はアーチボルト・ダグラスがサッカーを日本に紹介したことについては認識していなかったようである。

2) 例えばカレーライス、海軍で日常化した物がその後社会に広まっている。「海軍カレー」

3) 1884年に第一高等学校野球部対横浜外国人倶楽部との試合で一高が圧勝したことを当時の東京新聞が大々的に報道、欧米コンプレックスを抱いていた当時の日本人に大いに支持されたことから日本初の野球ブームが起こったとされている。さらに東京新聞はこの経験から、野球報道が購読者獲得に絶大な効果を発揮すると認識、後の六大学野球ブームを仕掛けてゆくこととなる。

これがモデルケースとなり、以後朝日新聞は1914年の全国中等学校優勝大会（現夏の甲子園）を開催、1925年には毎日新聞が全国中等学校選抜優勝大会（現春の甲子園）、1936年には読売新聞が東京ジャイアンツを結成してプロ野球を開幕するなど、戦前の日本野球の発展には新聞社が大きな影響を与えている。

- 4) 明治期の学校体育は「体操科」と呼ばれ、教材には各種体操が用いられ、原則としてスポーツが教材となることはほとんどなかった。スポーツを教材として取り入れることを主張したのが坪井玄道である。
- 5) 戦時中、日本のスポーツ団体の多くは戦争協力したとして、終戦直後の活動は禁止されていたが、野球に関してはGHQの副司令官だったマーカット少将が自身が元大リーグ選手だったこともあり、日本国民の効果的な統治と復興に野球が必要と判断し、他のスポーツに先駆けて活動を許可するようマッカーサーに進言、活動再開が許可されている。
- 6) 戦前、武道関連団体は大日本武徳会を結成、全面的に軍部に協力したために終戦後はGHQにより解散させられ、且つ学校体育においても「武道」の廃止並びに課外活動も禁止の処分を下された。
- 7) 日本のスポーツ界はともすれば現場至上主義になりがちで、特に当時はその傾向が強かった中で、クラマーの視点は実にユニークな提言であった。そしてこの提言を受け入れたことが後の93年のJリーグ創設以後の日本サッカーの発展の大きなベースとなっている。
- 8) 最盛期は1980年代後半でテニス1,300万人、ゴルフ1,500万人、スキー1,500万人、ボウリング1,200万人、フィットネス1,100万人となっている。テニス以外は東京オリンピック終了以後第一次ブームが到来している。
- 9) テニス、スキー、ゴルフは欧米特にヨーロッパではアッパークラスが愛好者として多く、日本のように大衆化しているのは北米だけである。又特にヨーロッパではサッカーのような労働者階級のスポーツとスキー、ゴルフのような上流階級のスポーツが混在することはあまりなく、愛好者と社会階層が相関関係にある傾向が強い。
- 10) 70年代高校サッカーは埼玉県と静岡県がリードしていた。特に埼玉県の浦和学院と武南、静岡県の清水商業と静岡学園はいずれも地元少年団出身選手が進学して活躍していた。
- 11) 野球ブームを起こしたと言われている1968年上梓の「巨人の星」は伝統的日本の価値観に則ったラインでヒットした。「キャプテン翼」はその対極にあり、このことから70年代後半から80年代初頭にかけて伝統的な日本のスポーツ価値観については伝統的日本の価値観に対する大きな変化が起こっていると考えることができる。
- 12) 35歳以下の世代の約7割は年収300万円以下、未婚率の上昇もこの年代から急速に上昇している。

参考文献

- ・朝日新聞ロストジェネレーション取材班「ロストジェネレーション」朝日新聞社 2007年
- ・Franco Cerretti 横山修一郎訳「セリエAの20世紀」ビクターブックス 2000年
- ・後藤 健生「日本サッカー史 代表編」双葉社 2002年
- ・市ノ瀬 敦「ポルトガル・サッカー物語」社会評論社 2001年
- ・片野 道郎「チャンピオンズリーグの20年」河出書房新社 2012年
- ・川淵 三郎「Jの履歴書 日本サッカーとともに」日本経済新聞出版社 2009年
- ・中条 一雄「デッドマール・クラマー 日本サッカー改革論」ベースボール・マガジン社 2008年
- ・N. エリアス, E. ダニング「スポーツと文明化」法政大学出版局 1995年
- ・三浦 展, 上野 千鶴子「消費社会から格差社会へ」河出書房新社 2007年
- ・宮台 真司他「サブカル真論」ウェイツ 2005年
- ・宮台 真司 神保 哲生「格差社会という不幸」春秋社 2009年
- ・小川 光生「サッカーとイタリア人」光文社新書 2008年
- ・大坪 正則「スポーツと国力」朝日新書 2007年
- ・S. モフエット 玉木正之訳「日本式サッカー革命」集英社インターナショナル 2004年
- ・サッカー批評編集部「ワールドサッカー歴史年表」株式会社カンゼン 2008年
- ・千田 善「ワールドカップの世界史」みすず書房 2006年

- ・セルジオ越後「日本サッカーと世界基準」祥伝社新書 2006年
- ・鈴木 弘輝「生きる希望を忘れた若者たち」講談社現代新書 2012年
- ・高島 航「帝国日本とスポーツ」塙書房 2012年
- ・堤 未果「ルポ 貧困大国アメリカ」岩波新書 2008年
- ・T. メイソン「英国のスポーツ文化」同文館 1992年

